

# 多様な人々の共創を伴う芸術文化活動の 価値はいかに評価できるか？

—— 金石町家(仮)における参加型評価の実践からの考察 ——

## How Can We Evaluate the Value of Co-Creative Arts and Cultural Activities: Reflections from Participatory Evaluation Practices at Kanaiwa Machiya

有 原 千 尋

公立小松大学 (大学院生)

**Abstract**: This study aimed to introduce participatory evaluation into co-creative arts and cultural activities, with two objectives:

- (1) to clarify the changes and impacts that dialogue and collaborative processes have on activity development and stakeholders, and
- (2) to clarify the effectiveness and challenges of evaluation as a means of revealing the multifaceted value of co-creative arts and cultural activities.

Evaluation workshops with organizers produced the following outcomes:

- 1) fostering mutual understanding of differing perceptions of value,
- 2) gaining discoveries and insights regarding the desired direction of evaluation,
- 3) reaffirming the value of the activity, and
- 4) enhancing participants' sense of ownership.

However, it also highlighted the need for an evaluation approach capable of capturing values that cannot be fully expressed in general terms.

Results from the stakeholder evaluation workshop yielded the following outcomes:

- 1) fostering a sense of closeness to the activity and a feeling of acceptance among stakeholders,
- 2) generating positive shifts in how participants perceived their relationship with the activity,
- 3) promoting mutual understanding among stakeholders,
- 4) encouraging reconsideration of the activity's value and fostering new perspectives and insights, and
- 5) revealing the multifaceted value of the activity.

A cross-analysis of the two workshops showed that dialogue and collaborative processes had effects promoting co-creation, including:

- 1) fostering empathy and understanding for other stakeholders' values,
- 2) creating new communication opportunities, and

3) enhancing stakeholders' sense of ownership.

Furthermore, the evaluation workshops made the multifaceted value of the activities explicit. At the same time, challenges were identified, such as the need for methods to lower the psychological barrier to verbalizing value and to explore ways of making not only value but also challenges explicit.

**Key words: Participatory Evaluation, Co-creation, Art Project, Conversational Discussion**

## 1. はじめに

### 1-1. 研究背景と目的

近年、日本各地で、様々な人々の協働・共創を伴い、社会と関与しながら展開される芸術文化活動（以下、共創型芸術文化活動）が活発化している。それら活動は、アーティストが個人主導で行うもの、自治体が文化事業として行うもの、民間企業が地域への文化支援や社会貢献の一環で行うものなど、活動主体や規模は様々で、その特性は一様ではないものの、新たな芸術的文脈/社会的文脈創出の可能性<sup>1)</sup>や、芸術と社会の新たな関係性構築の可能性が示唆されている（熊倉ほか 2014）。昨今のわが国の文化政策の動向を鑑みると、2017年に成立した文化芸術基本法においては、芸術文化と社会の諸領域との有機的な連携の必要性が明示され、芸術文化の持つ様々な価値や固有の力を広く社会に開いていくことが益々求められている状況にある<sup>2)</sup>。そうした状況において、社会・コミュニティの諸課題に対する視座をも持ちながら展開される共創型芸術文化活動は、人々の創造性喚起や社会包摂などといった社会変革が期待される芸術実践である。

一方、共創型芸術文化活動は、その特性から、活動が有する価値が様々であり、それら多様な価値を動員数や経済効果などの指標だけでは十分明らかにすることができない。また、様々な立場を持つ活動関係者間で生じる評価意識の乖離など、活動評価の難しさが指摘されている（菊池ほか 2016, pp.72-87; 東京アートポイント計画 2011; NPO 法人アート NPO リンク 2019）。加えて、それら評価の課題が、共創型芸術文化活動の持続性を損なう危険や、異なる立場を持つ関係者間の信頼関係構築の上で障害となる危険性がある。

動員数や経済価値による評価や、資金元など特定の立場を有する関係者からの一方向的な事後評価といった、従来型の評価が抱えていた課題を克服し、新たな評価のあり方を提示する手法として「参加型評価」がある。参加型評価とは、評価の専門家だけでなく、活動に関わる様々な利害関係者と共に評価を行う手法（源 2016, pp.21-22）であり、多様な視点で活動の価値を見出すことが可能となる。また、利害関係者間の対話・協働を伴う評価プロセスが、関係者間の相互理解を深めることによる新たな関係構築や、活動に対する当事者性の広がりなど、個人や組織の変容をもたらすことが示唆されている（源 2016, pp.26-29）。

一方、参加型評価の持つ可能性については、芸術文化領域の評価においても注目されているものの、現段階での実践研究事例は少なく、参加型評価導入による活動展開への影響や、活動関係者に具体的にどのような変容が起きるのかなど、その効用については十分に検証されていない。また、参加型評価自体も画一的な手法ではなく、活動特性や評価の活用目的、評価における利害関係者と評価専門家の関係などに応じて、これまで複数のアプローチが提唱されてきた（源 2016, pp.29-34）<sup>3)</sup>。そのため、今後、現場での活用可能性を高めるためには、実際に様々な活動形態での評価実践を重ね、共創型芸術文化活動における参加型評価の効用を明らかにすることや、多角的な価値を有する共創型芸術文化活動の特性に適したアプローチを検討していく必要があると考える。

以上を踏まえ、本研究では、共創型芸術文化活動への参加型評価の実装を行い、(1)参加型評価における対話・協働プロセスが活動展開及び活動関係者に与える変化や影響を明らかにすること、及び、(2)共創型芸術文化活動の多角的な価値を顕在化する評価プロセスとしての有効性と課題を明らかにすること、この2点を目的として研究を実施する。

## 1-2. 研究の位置づけ

共創型芸術文化活動に限らず、芸術文化活動における価値の評価の困難さや課題については、これまで多くの芸術文化関係者により指摘がされてきた。例えば、「事業の効果・成果の発現が一概に予期できない、生み出している価値が見えづらい特性があり、定量的な指標設定が難しい」（静岡県文化プログラム推進委員会 2021, p.5）点や、芸術文化活動においてもアカウントビリティの重要性が高まる中で評価が形骸化し、現場の「評価疲れ」が生じている（アーツ・コンソーシアム大分 2019, pp.14-15）、といった課題が言及されている。また、国際的にも、芸術文化の効果が多面的であるゆえに、その価値を単一の数値指標として示す在り方には懐疑的な見方が広がっている（Geoffrey Crossick & Patrycja Kaszynska 2022, p.288）。さらに、「芸術実践者は「感性的」な出来事を定量化しようとすることに無理があることを実感しているがゆえに、そもそも評価に懐疑的であることが少なくない」ことから、評価に係る人的・時間的・資金的コストが活動実践者の負担となり、芸術の実践者と支援側の信頼関係を損なう危険性があることも指摘されている（NPO 法人アート NPO リンク 2019, p.4）。

そのような従来型の評価の課題が指摘される中で、近年、評価を「異なる立場で事業に関わる人同士が、コミュニケーションを行えるハブ（結節点）」（文化庁×九州大学共同研究チーム 2021, p.122）として捉え直す見方や、評価プロセスにおける対話や協働を重視する在り方が広がりを見せている。そうした評価手法の1つとして、「参加型評価」がある。参加型評価の効用について、源は、「評価の過程に参加することによって、評価対象への理解が深まること、当事者意識や責任感が醸成されること、利害関係者間の相互理解などが進むことをとおして、評価結果の活用度合いを高め、評価対象プログラムの改善につながる」と整理する（源 2016, p.26）。また、三

好は、従来型評価と参加型評価の相違点について、従来型評価は「評価結果自体が利害関係者に影響を与えるソース」となるのに対し、参加型評価は「評価を実施している過程自体が影響を与えるソースであり、評価過程を使って利害関係者に影響を与えることを重視する」点にあると述べる（三好, 田中 2001, p.66）。

このように、参加型評価は評価プロセスにおける利害関係者の対話や協働を重視する性質を持ち、これまでに、開発援助、福祉、教育、行政活動など、様々な領域において評価実践がされてきた（源 2016）。芸術文化領域においても、数は限られるものの、いくつか参加型評価の実践研究がなされている。吉田は、愛知県で実施された国際芸術祭「あいちトリエンナーレ」を事例として、市民を対象とした評価ワークショップを行い、参加型評価の活用によって、市民やあいちトリエンナーレ実行委員会がエンパワーメントしていく可能性を示した（吉田 2014, pp.39-52）。また、九州大学は、福岡県立ももち文化センターと協働し、同施設が展開する、障がいのある人々を対象とした演劇ダンスワークショッププログラムを対象に参加型評価を導入した。本事例では、評価プロセスを通して、立場の異なる活動関係者の新たなコミュニケーション機会が創出されたことに加え、評価から派生してプログラムの新たな構想が生まれたことが示されている（文化庁×九州大学共同研究チーム 2021, pp.171-179）。

一方、そういった共創型芸術文化活動における参加型評価の研究実践事例はまだまだ少なく、他の活動事例においても同様に参加型評価の効用が得られるのか、どのような課題が生じうるのかについては、十分な検証がなされていない。また、個々の活動特性や、運営者および利害関係者の性質、参加型評価の具体的なアプローチ方法によっても、得られる成果や課題に大きな差異が生じることも予想される。本研究では、評価軸の定まっていない初動期の共創型芸術文化活動を対象に参加型評価の実践と分析を行い、対話・協働を伴う評価プロセスが活動関係者や活動展開そのものに与える影響をより詳細に捉える。またその実践と分析を通じて、共創型芸術文化活動の多角的な価値を捉える機能を有する評価アプローチであるのかを検証する。これらの知見は、評価自体を「共創を生み出す場」として生かす新たな評価のあり方や、活動性質が多角的であるがゆえに適切な評価軸が定めにくく価値が示し難い、という課題へのアプローチを提示するものである。また、そうした知見が今後の評価開発・実践に生かされることにより、共創型芸術文化活動の持続的活動展開を支える基盤形成に寄与することを目指す。

## 2. 研究対象と方法

### 2-1. 研究対象

本研究は、石川県金沢市金石地区に所在する「金石町家(仮)」を対象とする。「金石町家(仮)」とは地元企業である加賀建設株式会社が運営母体となり、地域のシンボルであった伝統的な町家をリノベーションし、2023年7月に開館したコミュニティスペースである。「なにをしてもいい、なにをしなくてもいい、(中略)“まちの居場所” & “学びの場所”」をコンセプトとして掲げ<sup>4)</sup>、

多様な人々の共創を伴う芸術文化活動の価値はいかに評価できるか？

地域内外の人々や地域の子どもたちにとって日常的な憩いの場であり、かつ、様々なヒトやコトとの出会いを介した創造性醸成や学びを生み出す場となっている。

また、本活動の特徴的な点として、運営メンバーに、編集者のバックグラウンドを持つ人材やデザイナー、アーティストなど、クリエイティブ人材が参与している点が挙げられる。運営メンバーは、日常的にこの場所に滞在し、来訪者とコミュニケーションを図ったり、様々なプログラムの企画運営を行ったりする役割を果たしている。本活動では、そうした運営メンバーの専門性を生かしたプログラムが多数展開されており、運営開始当初より、アーティストが場所に滞在して制作活動を行うアーティスト・イン・レジデンスや、アートワークショップ等の表現・創作プログラムが実施されてきた。さらに、これまで活動展開の過程で、地域内外の様々なクリエイティブ人材との繋がりが生まれており、地域外のアーティスト・クリエイターの展覧会や、それら人材と連携・協働した芸術文化イベントなどが定期的実施されている。加えて、運営メンバーは、本活動で出会った様々な人々の挑戦を応援する姿勢を重視しており、芸術・創作活動を始めとする、多様な文化活動を介した人々の共創が生まれている。

一方、活動当初からの運営者の課題意識として、現状の活動が目的を果たしているのかを明らかにすることや、本活動がまちや人に及ぼす影響を顕在化させる方法が無いという点が言及されていた。また、本活動は非常に多様な活動が展開されており、関係者の活動への関わり方も様々であることから、本活動の価値の捉え方は関係者個々人で大きく異なる可能性が高い。そのため、画一的な評価軸を定めることによって、本活動がもつ多角的な価値を見落としかねないという潜在的な課題もある。そうした状況下で、本活動の成果や意義について、運営母体や第三者に伝えることが難しい点が、活動の持続的展開の上で課題となっている。

## 2-2. 研究方法

本研究では、本活動の評価のあり方を検討し、また、活動の持つ様々な価値や意義を明らかにするため、金石町家(仮)の運営メンバーとの協働のもと、①運営評価ワークショップ（以下、運営評価WS）（3章）と、②関係者評価ワークショップ（以下、関係者評価WS）（4章）を実施した。それぞれの具体的な実施概要や目的は、各章で後述する（3-1, 4-1）。また、各WSを通して得られた成果や課題について、WS参加者の言説や、事後アンケートを基に考察を行った（3-3, 4-3）。さらに、①運営評価WSと②関係者評価WSの横断的分析に基づき、共創型芸術文化活動への参加型評価導入による、(1)対話・協働プロセスが活動展開及び活動関係者に与える変化や影響および、(2)共創型芸術文化活動の多角的な価値を顕在化する評価プロセスとしての有効性と課題について考察した（5章）。

### 3. 運営評価 WS

#### 3-1. 実施目的と方法

金石町家(仮)における評価の課題を明らかにするため、事前に企画運営コアメンバー3名に対してヒアリングを行った。その結果、共通の課題意識として、①現状の評価が運営者の主観のみによる評価であることに対する危機感、②評価の軸やあり方が定まっていない点、③活動の継続性を担保する上で他者を納得させる成果を示す評価が必要だが不足している点が挙げられた。

金石町家(仮)での主な役割		属性・バックグラウンド	企画運営コアメンバー (アルバイト)
A氏	運営マネージャー (業務委託)	編集者 / 学びのコーディネーター etc.	
B氏	プログラムコーディネーター (業務委託)	グラフィックデザイナー/ コミュニティデザイナー etc.	
C氏	バックオフィス (加賀建設社員)	事業企画関連部署所属	
D氏	町家滞在 / 運営スタッフ (アルバイト)	アーティスト	
F氏	町家滞在 / 運営スタッフ (アルバイト)	大学院生	

※本図中の役割および属性は、WS実施時のもの

図1 運営評価 WS 参加者の属性

これらの課題から、まずは評価の方向性を検討していく上で根幹となる、活動目的や評価目的の言語化および意識共有を図ることを目的とし、運営メンバー5名(ワークショップ実施時点の全運営メンバー)を対象とした対話型評価WSを実施した。WS参加者の属性を示す(図1)。実施日時は、2024年10月18日19:00~23:00である。なお、実施時間は、当初2時間を予定していたが、想定以上に議論が白熱し、予定していたタイムスケジュールでの進行が困難となったため、参加者の了承を得た上で時間を延長した。また、WS開始前に、本WSの目的や方法に関する趣旨説明を行った。

WSは、(1)金石町家(仮)の活動目的・意義、(2)金石町家(仮)で評価を行う目的、(3)今後、どのような観点で評価を行いたいのか、の3つのテーマについてブレインストーミング形式で行った。WSの手順は、(a)各自、付箋に考えを書き出す、(b)付箋の内容を読み上げながら、順番に1枚ずつ模造紙に付箋を貼り出す、(c)他の人の意見で関連した付箋があれば近くに貼り出す、(d)付箋を全て貼り出した後、内容の関連性を確認しながら付箋をグルーピングし名前を付け、それぞれのグループの関係を確認する、これら(a)~(d)の作業を3テーマそれぞれについて実施した。また、運営者から得た言説を3テーマ別に整理・ビジュアル化を行い(図2~4)、運営者および経営者側へ共有した。

#### 3-2. 運営評価 WS で抽出された意見の整理と分析

本節では、運営評価WSで抽出・分類された意見を3テーマ別に整理・分析する。整理・分析にあたっては、運営評価ワークショップを基に作成したビジュアル図(図2~4)を参照し、特徴的な言説等を抜粋し、要点を述べる。以下、本節では、【 】をグループ名、( )を付箋数、〈 〉を各付箋の言説内容、「 」をWS内での参加者の言説として示す。



一方、どの目的や意義が重要かという問いに対しては、「(目的・意義の中で)何が強いとかは全くなくて、(中略)「偶然」も「ありのまま」も、意図していないのにそうなる、っていうことが良い。(中略)こうならなきゃいけないな、とも思っていないし、こういう人じゃないとこの場所に居てはだめ、ということもない。」といった意見や、「ざっくりとした目的はすごい緩く共有していて、その時々状況に合わせて、その時に各々がしたいと思ったことを積み上げていっているから、この空気感ができている」などの言及があり、活動の評価が必要だと感じる一方で、固定化・優先順位化された目的や意義を掲げることへの違和感も感じていることがうかがえた。

### 3-2-b. 金石町家(仮)で評価を行う目的

計 28 枚の付箋が出され、【継続性のため(6)】、【価値の発信・展開(5)】、【仲間を増やす(4)】、【事業展開(3)】、【自信(2)】、【プロセス・道しるべ(2)】、【対外を知る(2)】、【新種の虫(2)】の 8 つのグループに分類されたほか、〈共通言語かつ対外言語〉や〈わからない〉といった分類外の言説を得た(図 3)。

その中で、【継続性のため】は、運営メンバー全員の言説によって構成されるグループである。〈資金元・出資元へ〉活動の価値を提示し予算を得るなどといった事業の継続性担保の観点だけでなく、〈ずっとこの場所があっていい理由づくり〉という、運営メンバー自身の〈居心地〉の良さを得るためにも評価を必要としていることが示唆された。また、評価を通して本活動の【価値の発信・展開】を行い、活動に共感する【仲間を増やす】ことに関しても、複数メンバーからの言及が見られた。そのほか、WS 内で対話が深まった言説として、〈共通言語かつ対外言語〉がある。メンバーからは、「我々自身の納得感もあり、他の人にもちょっと伝わるかもしれない(言葉)」を評価の過程で得ることに 1 つの意味があるということ、また、その言葉が必ずしも一般的な言葉ではなく「オリジナルの言語でもいい」と考えている、との言及があった。

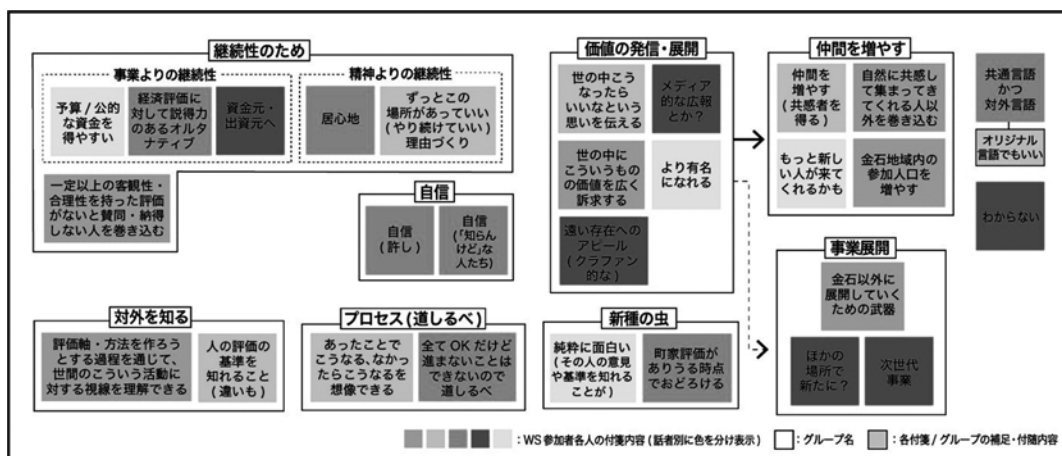


図3 運営評価ワークショップ言説整理図「金石町家(仮)の活動で評価を行う目的」

(※ WS実施時は色分けした付箋を用いており、ビジュアル図においても話者別に色を分け示した)

一方で、一部メンバーからは、なぜ評価が必要であるのかが「わからない」という率直な意見があったほか、「町家のような活動を評価できるあり方が見つかることは、新種の虫を見つけるような、一種の発見だと思う」といった、本活動における評価開発の困難さと、それゆえの期待感に関する言及が見られた。

3-2-c. 今後、どのような観点で評価を行いたいか

計41枚の付箋が出され、【日々の仮説検証(8)】、【出資者のメリット(4)】、【感情(4)】、【個人の変化(能力の定量評価/行動の定性評価)(3)】、【言葉や日常(3)】、【多様性・複雑さ(3)】、【おもしろい評価の在り方(3)】、【よし悪しではない評価(2)】、【支え・道しるべ(2)】の9つのグループに分類されたほか、〈広く他者が納得してくれるなら、ある程度ドライに捉えても良いとも思っている〉や〈共感・賛同者の広さ〉、〈続くために必要なこと〉といった分類外の言説を得た(図4)。〈幸福度〉や〈ここに居たいと思えるかどうか〉で構成された【感情】は、4名からの言及があり、複数メンバーが評価の中で捉えたいと考える共通項であることが示された。一方、このテーマに関しては、運営メンバー各々の評価に対する考え方の差異も表出する結果となった。例えば、【出資者のメリット】、【個人の変化(能力の定量評価/行動の定性評価)】、【多様性・複雑さ】に

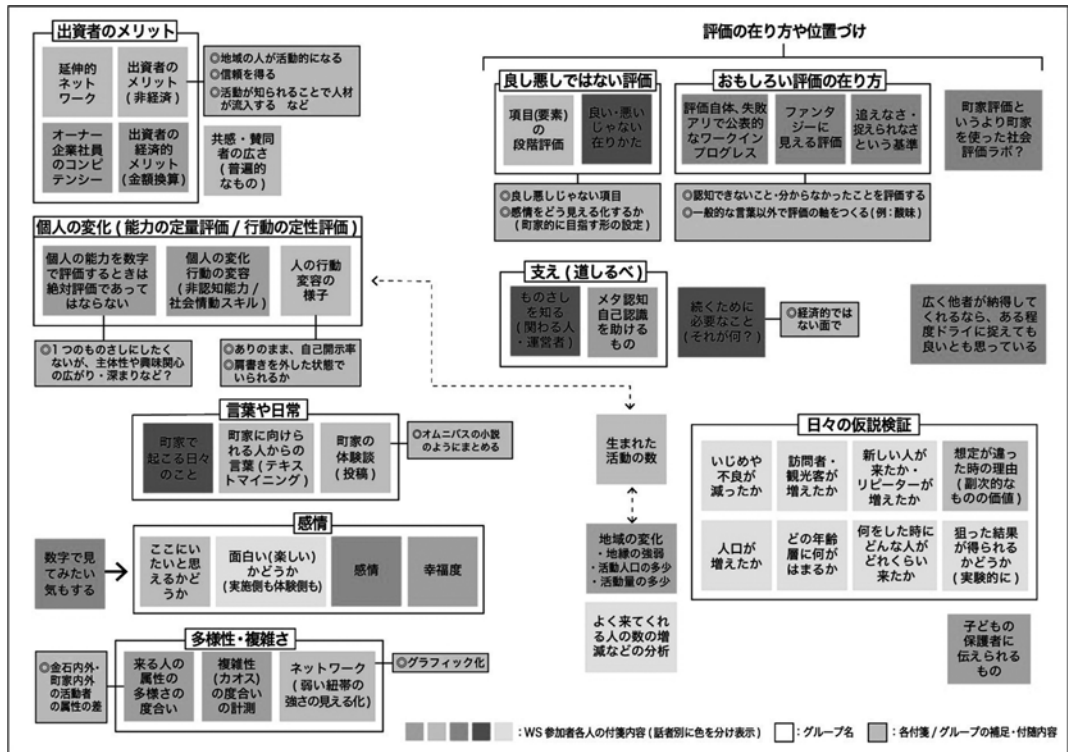


図4 運営評価ワークショップ言説整理図「今後、どのような観点で評価を行いたいか」  
 (※ WS実施時は色分けした付箋を用いており、ビジュアル図においても話者別に色を分け示した)

については、いずれも同一2名のみが言及しているほか、【日々の仮説検証】もほぼ1名のみで構成されるなど、話者の偏りが確認された。

また、デザイナーからは、「評価自体をコンテンツ化していく方向もある。結果的にその評価が失敗だったとしても、失敗も有りの評価、ワークインプログレス<sup>5)</sup>としての評価（という位置付けで行う）」との言及があるなど、デザイナーやアーティストを中心に、評価の在り方や位置づけそのものに関する提案が複数見られた。中でも、〈ファンタジーに見える評価〉や、〈追えなさ・捉えられなさという基準〉など、分かりやすい評価軸による評価ではない在り方を求めるメンバーも見られた。

### 3-3. 運営評価WSを通して得られた成果と課題

本節では、運営評価WS実施時および実施後に得られた参加者の言説を基に、本WSの成果と課題を整理する。

はじめに、得られた成果について整理する。成果1点目は、運営メンバー各人が、自身と異なる活動の価値や評価の捉え方について、気づきや相互理解を醸成する機会となった点である。運営メンバーからは、WSの振り返りの中で、「一番の気づきとしては、なんか、みんな色々な言葉で書くなあっていう（中略）多分、同じ言葉を使っても、みんな少しずつ意味が違って使ってるんだろうし。」との言及や、自身以外の回答に対して「（活動が自分達の）やりがいとして感じられるか、という視点が普遍的な部分で入ってきていると感じた。」などの言及が見られた。ここから、本WSを介して、運営メンバー間でも異なる評価意識を有していることが顕在化したと同時に、双方の考え方の共有機会となったことが示された。また、そうした成果を促進した要因の1つとして、WS時に各人が記載する付箋の色を発話者ごとに分けた点が挙げられる。ディスカッションの過程においても、「（付箋が）カラフルなグループはどれだろう？と言う見方をしている」などの言及があり、付箋の色の多少によって、ほぼ全員が共有している考え方と、一部メンバーのみが抱く考え方が、視覚的に可視化された点が有効であった。

成果2点目として、運営として目指す評価の方向性に関する気づきを得られた点がある。その一例として、WSでの相互の対話を通して、「一般的な言葉からはみ出ている部分をちゃんと見えるようにする方法が編み出せたら、それも評価基準になり得るんじゃないか。それは、多分、「多様性」とか「複雑性」の評価みたいなことに繋がるんだと思うし。そういうところを大切に評価の仕方でありたい」といった、本活動の評価の方向性として重要視したい点への気づきが見られた。また、WSの中で、評価を行う目的の1つに、活動を表現する言葉を得るといった議論があった点と関連し、「（オリジナル言語は）世界を捉えるための概念として多ければ多いほど面白いんじゃないかと思っていますね。（中略）多分、こういうこと（WS）の結果、生まれてくる言葉があるんだろうと楽しみにしている」といった言及があり、分かりやすい成果を示すことだけを目的としない評価の在り方への期待感があることが示唆された。

成果3点目は、活動の有する価値や意義の再認識に繋がった点である。運営メンバーからは、自身は付箋に記載していなかった内容についても、他のメンバーが付箋に記載した内容や、ディスカッション中の言葉を見聞きする過程で大きく共感する部分があった点や、自身もその価値・意義を再認識したとの言及があった。

また、成果4点目として、WS後に、「(WSを介して)町家のことにますますフォーカスするようになった」との言葉が得られており、運営評価WSが活動に対するオーナーシップ向上に寄与したことが示された。

最後に、成果5点目として、WSのプログラムとしての面白さや可能性が見出された点を挙げる。運営メンバーからは、「(WSが)楽しかったってということが、「使えるな」って思った感じがある。これを今後、利用者の方々と一緒にやると、評価についてとか価値について考えること以外のことが生まれると思います。例えば、町家に対して主体的な考えを持つとか、もっと来るようになるとか、そこから運営スタッフが現れる要因の一つになるとかということがあるだろうと思う。」との言及があり、活動における共創を促進させる仕掛けとしての可能性が期待される。

一方、課題として、WSの工程を通して、言葉を一般化・普遍化していくことに対する抵抗感が示唆された。運営メンバーからは、「みんなが言う言葉とか雰囲気よりも、付箋になると落ち着いて見えてしまって。付箋よりもグルーピングは味気なくなってしまっていて。見れば見るほど面白く無くなっていく印象があります」との意見や、「(グループの名前づけで)要約しようとして出てきた言葉って、一般的な言葉であって(中略)、ここからはみ出ることの方が逆に町家らしさを作ってるはずで。」といった、一見綺麗な言葉や普遍的な言葉に整えすぎることによって「町家らしさ」が無くなるといった指摘があった。また、その点と関連し、「一般的な言葉にして括ろうっていう作業は、評価基準を作ろうっていう話には相応しいんだけど、そこから少しずつ(中略)こぼれていっている部分だったり、それぞれの、この言葉から感じるものの違いであったりとか、それがたくさんあることが、むしろこの町家らしさなんだろうなと思うと、それを評価する方法とか編み出せたら理想的だな」といった、一般化した言葉では表現しきれないニュアンスを含む価値をすくい上げる評価の在り方を求めている点が明らかとなった。

一方、そうした言及もある反面で、「一般化された言葉じゃないと、一般の人たちに通用しない。(中略)評価は、その共通見解を得るための手段なんじゃないか」といった意見も見られた。ここから、運営メンバー間で、今後取り組む評価の在り方そのものに対する捉え方の擦り合わせが必要であることが示された。

## 4. 関係者評価 WS

### 4-1. 実施目的と方法

金石町家(仮)の活動に関わる、多様な立場の関係者を対象として、「金石町家(仮)の価値や意味ってなんだろう？」をテーマとした評価 WS を実施した。実施日時は、2024年11月10日13:00～16:00である。本 WS の目的として、①運営以外の関係者が捉える金石町家(仮)の価値や意義を明らかにすること、および、②関係者が活動の価値や意義について言語化・共有し、他者の視点を理解するプロセスを通じて活動を「自分ごと」として捉える機会とすることの2点を設定した。また、本 WS の設計にあたっては運営者との意見交換の上、以下の3点に留意し計画を行った。1点目は、活動関係者と利害関係の少ないファシリテーターを確保すること、2点目は、各参加者が思考を深められるよう、同じテーマでグループメンバーを変えて複数回ディスカッションを行うこと、3点目は、できるだけ一般的な言葉にとらわれすぎず、参加者それぞれの言葉で表現してもらうよう促すことである。

WS 参加者は、運営メンバーとの相談の上、金石町家(仮)を日常的に利用している地域住民や、金石町家(仮)での各種プログラムにおいて協働関係のあるアーティスト・クリエイターなど、34名(当時の運営メンバー5名を含む)への参加依頼を行った。その結果、アーティストやクリエイター、地域住民、学生など、多様な属性を有する20名の参加があった。WS 参加者の属性を示す(図5)。

次に、本 WS の工程を示す。はじめに、筆者が WS の目的や方法について簡単なレクチャーを行った。その際、WS のテーマが「正解・不正解が無い問いであること」や、「各々が感じている感覚や言葉を大切にすること」といったポイントを示し、参加者各人が自由な対話ができるよう促した。次に、参加者を5名ほどのグループに分け、ワールドカフェ方式での WS を実施した。WS の手順は、(a)個人で「金石町家(仮)の価値や意味」について付箋に書き出す、(b)順番に、付箋の内容を発表しながら模造紙に貼り出す、(c)メンバーで意見交換しながら付箋をグルーピングする、(d)付箋の言葉を用いながら各グループに名前をつける、(e)まとめた付箋を基にグループで意見交換を行う、(f)グループ別に全体発表、の全6工程である。(a)～(f)を、グループメンバーを入れ替え、計2回実施した。なお、各グループには、1名ずつファシリテーターが付き、WS を進行した。

また、WS で得られた言説は、本研究者が再分類・分析・ビジュアル化を行った後、運営者、経営者側および WS 参加者に共有した。再分類・分析の工程は、次節で示す。



図5 関係者評価 WS 参加者の属性

#### 4-2. 関係者評価 WS で抽出された意見の整理と分析

各グループのディスカッションでは、「金石を目指す目的地になる」や「半分、家」、「ゆりかごから墓場まで」といった、参加者各人の言葉や捉え方によって本活動の価値や意義が表現された、独創性あるグループ名が複数抽出された。また、グループ別の全体発表（工程（f））においては、金石町家（仮）が「チャレンジできる場所になっている」点や「さまざまな人と出会える」場である点に関する言及が、多くのグループで共通して見られた。また、「アートと出会える」といった、本活動で展開されている芸術文化関連プログラムや、アーティストやクリエイターと出会える環境に対して価値を感じていることもうかがえた。

関係者評価 WS 後、WS で出された全ての付箋、計 292 の言説（以下、コード）を対象に、各コードの内容および、各グループのグルーピング結果をもとに再分類した。再分類は、全コードを統合した後、①内容の類似が見られるコードをまとめる形で 62 のグループ（以下、小分類）に整理、②小分類をさらに 21 グループに整理（以下、中分類）、③中分類をさらに 5 グループに整理（以下、大分類）の手順で行った。なお、小・中・大分類ともに、各グループの名称は分類されたコードの内容に基づき決定した。以下、再分類表（表 1、2）をもとに、関係者 WS で抽出された本活動の価値や意味について、要点を抜粋し述べる。なお、本節では、【 】を大分類名、《 》を中分類名、{ } を小分類名、「 」を各付箋の言説内容、（ ）を付箋数として示す。

再分類の結果、【自己実現・創造性の喚起(60)】、【許容力と安心感のある居場所(83)】、【多様な人がともに生き、まなびあう(77)】、【建物や運営のあり方が魅力的(41)】、【金石のまちとひとつをつなぐ(27)】の 5 つの大分類と、その他の言説(6)に整理された。

まず、【自己実現・創造性の喚起】は、中分類全体の中で最もコード数の多かった《チャレンジしたくなる環境や応援してくれる人がいる(32)》や、本活動の特色の 1 つである《アート・クリエイティブなことと出会える(16)》で構成された分類である。本活動が自己実現や自己表現ができる環境である点や、各人の創造性を喚起するようなアート・クリエイティブな物事や人との出会いがあり、そうした出会いが「新たなアイデア・発見・発想が生まれる(6)」ことに繋がっている点について、全体発表時にも複数グループから言及があった。

次に、【許容力と安心感のある居場所】は、《居心地よい空気感と人(24)》や、《そのままでもいい/空間・場の許容性(23)》といった中分類で構成され、大分類の中で最もコード数の多い分類である。本活動が「自然と人が集まり繋がる(9)」場を生み出しており、かつ、「肯定・許容・受容してくれる(9)」、「価値観の押しつけや「こうあるべき」が少ない(7)」といった、各人が肯定される許容性や寛容性を持った場の在り方に、多くの関係者が価値を見出していることが示された。

また、【多様な人がともに生き、まなびあう(77)】も、多くのコードで構成された大分類である。特に、《境目ないフラットな関係性と多様性のある場(31)》に関する言及が多く、「子どもも学生も大人も運営もフラットな関係」、「ゆりかごから墓場まで」、「地域の枠のない憩いの場」などのコードが抽出された。本活動において、多様な人々がフラットな関係性の中で共存する場の

表1 関係者評価ワークショップで得られた言説の再分類表(1)

大分類	中分類	小分類	コード(言説)	
自己実現・創造性の喚起	チャレンジしたくなる環境や応援してくれる人がある	チャレンジしやすい環境	チャレンジできる場所(3) / 何でもチャレンジしやすい環境や人がある(3) / 安く借りられる / 安心して挑戦できる / 様々な使い方ができる部屋が沢山ある / 何かをしたくなる空間 / 実践できる場所(仕事・活動・コミュニケーション) / スピーディーさ / やれたらと思ったことがすぐできる・手伝ってもらえる	
		挑戦を応援してくれる・互いに応援できる	誰かのやることを応援する・話せる / チャレンジボードなど人のアイデアが見れる / 1人でレンタルすれば孤独だけど1人じゃないと強くなる / 自分の音楽を聴いてもらえる場所 / 応援してくれる / やってみようと思わせてくれる / やってみようと言ってくれる / 挑戦を後押ししてくれる人がある	
		チャレンジ精神が生まれる	チャレンジ精神(2) / やってみようの気持ち(実践が大事) / 新たな発想・チャレンジ / 何かイベントしたくなる / 何かできそう / いろいろ活動にふれられる	
		チャレンジのハードルが低い	色んな意味でハードルが低い / クオリティにこだわらない / 自分の本業とはちがうことを披露できる / 普通のことをちょっとイベント化している	
	アート・クリエイティブなことと出会う	クリエイティブで新たな刺激があることへの期待感	刺激のある場所(アート・写真) / 少しクリエイティブなのが嫌い! / ただノスタルジーに浸るのではなく常に新鮮さがある / 何か面白いことをしているんじゃないかと思う場 / オルタナティブスペース?	
		多様な面白い作家・作品・WSに出会える	面白いWSが見れる / WSアイデアが豊富 / 多ジャンルの作家さんの作品・WSが見れる / 作品の展示がいつも面白い	
	アイデアが生まれ、実現できる	表現の楽しさを共有できる	表現(音楽)の楽しさの本質を共有できる(2) / アドリブの楽しさが伝わって / 音楽を聴いてもらえる	
		アーティストやクリエイティブなことと距離が近い	クリエイティブなこととの距離が近い / 身近にアーティストがいる / 身近にアート・アーティストを感じられる	
	許容力と安心感のある居場所	居心地よい空気感と人	新たなアイデア・発見・発想が生まれる	雑誌から面白いアイデアが生まれる / 異なった世代の人たちのアイデアに驚いてしまう / 新しい発見がある / 新しい発想が生まれる / 色んな人が集まることで色んな話が出て色んな発想が生まれる / 子どもの自由な発想にハツとする
			アイデアが実現できる	アイデアを実現できる場所(イベント・WS・展示会...etc.) / アイデアを実現できそう
			人とアイデアが繋がる	出会いとアイデアをつなぐ場所 / 人とアイデアをつなぐ場所
			お昼寝したくなるような居心地のよさ	お昼寝したい場所(2) / 人の声や音が心地よい / 居心地がよい・あたたかい / 和室がとても居心地がよい / やさしい場所 / いい休日 / 流れる時間がゆっくり
心豊かな人		おばあちゃん家のような安心感	おばあちゃん家に来たみたい! / あったかい・ウェルカム / 安心感 / ポートできる / おばあちゃん家にいるような安心感あり / おしゃれかもしれないけどキレイすぎない	
		心地よい距離感	よい距離感 / ある意味ほっとしてくれる / 良い意味で放っておいてくれる場所 / ここならでは人の距離感がある(仲良くもなれる)	
そのままの空間・場の許容性		心豊かになるような居心地のよさ	優しい人が集まってる / 気取った人、自分を大きく見せようとしてる人がいない / 厚かましい人がいない	
		ゆるく内側に入れてくれる空気感	他の方と自然に話せる空気感 / ゆるく内側に入れてくれるような感覚(2)	
		肯定・許容・受容してくれる	自分を肯定してくれる / 自由にふるまうことが許容されていると思える / 許容してくれる / 寛容である / 受け入れる / いろいろいる人との会話に本音が出やすくなる場(信頼感) / 自由に過ごせる / 誰か来て自由で楽しめる / 羞恥感がない	
		価値観の押しつけや「こうあるべき」が少ない	価値観の押しつけが少ない(2) / ルールがあるようでない・ないようである / あるべき姿みたいなものが求められにくい / すべきことが指定されない / 何してもいい空気・自由である(自由ということが悩み) / NGなし(NGあってもNGワードなし)	
心の居場所		目的がなくていい	何かしなくちゃいけない緊張感無 / 目的がなくていい / 目的が無くても来れる / すべきことがない / 用事がないのに行くのかなと感ずる場所	
		汚れてもいい空間	汚れてもいい / 壁とか付箋べたべたOKなのがすごい	
	心の避難場所	心の避難場所 / 不安なとき・人と話したいから来る場所 / いいこと・悪いこと・聞いてほしいことを気楽に話せる場所 / 「誰かいる気がする」という場所を、「自分がない」ところ		
	いつでも戻れる居場所	期間が空いていても戻って来れる場 / 時間を越えても聞かれる・会ってなくても聞かれる / 長い期間空いても戻って来れる場所 / 常識にならないといけないかでない		
人に会える・気配を感じられる	サードプレイス	サードプレイス / 学校・家以外の場所だからこそ居場所感 / 友達の家 / 大学の外のたまり場(2)		
	つい長くしゃべりしてしまう場	つい長くしゃべりしてしまう / おしゃべりスポット / 来るとついしゃべり込んでしまう		
	自然と人が集まり繋がる	人がいる / 会いたい人に会える / 話ができる / 自然意志で集まってくる場所 / 自然と人が集まる場 / 人が集まる場所 / 人と人が繋がる / 人と人を繋げる / 人が集まる話中できる		
	人の気配を感じる	色んな人の気配を感じられる / 人がいた痕跡が感じられる / 集中できる(ほどよく人の気配がある) / 周りが勉強だけしてはわけではなから作業に集中できる		
元気がもらえる	ワクワクする場・空気感	大人も子どももワクワクできること / 何か楽しいことがあろうな気がする場 / 楽しそうな空気感 / 「こんな面白いところあるよ」って言いたくなる場所		
	子どもや若者から活力や癒しをもらう	子どもから自由や元気をもらう / 子どもたちとふれあえる「癒し」 / 若い人のエネルギーを感じ取る		
	境目ないフラットな関係性と多様性のある場	大人と子どもがイープ / フラットに話せる / 「店の人と客」という関係ではない / プロアマ関係なく / 子どもも学生も大人も運営もフラットな関係 / 肩書きを感じにくい / 押取れない(2) / 色んな境目がない(2) / 換目がいい(スタッフと利用者・大人と子ども・建物の中と外) / 立場や年齢を気にしない / 年齢・立場そんな関係なし		
	多様な人々がともに生き、まなびあう	年齢問わず交流できる / ゆりかごから墓場まで / いろいろ小さい子からおじいちゃんおばあちゃんまでわいわい / 世代を超えた交流 / 子どもたちが学校以外で多様な大人と交流できる / 子どもたちとお年寄り交流できる / 大人も子どもも自然と混ざり合う / 大人と子どもの共存 / アーティスト・クリエイターが結構来るが、そうじゃない人がたくさん来て自然に混ざって / いろいろ人がゆるく混ざるところ / 多ジャンル・多様性		
いろいろな人が出会い、交わる	さまざまな人に開かれた場所	地域の枠のない憩いの場 / 小さい子からおじいちゃんおばあちゃんまで来れる / アーティスト・フリーターでも居やすい / 子ども・大人の居場所 / 家族・子どもと過ごすが楽しい / 子どもも大人も楽しめる場所 / アーティストがたくさん来るけどアーティストだけの場所ではない(特定の人たち専門の場所ではない)		
	いろいろな人との出会い・交流(集う人の多様性)	いろいろな人たちが出会う(3) / いろいろいる人やコトと聞かれる・繋がる(2) / いろいろいる人との意見交流 / 色んなジャンルの人と交流できる / 色んな人が集まる / はじめましての人とも話して仲良くなった / 人と人が出会って楽しいことをするところ / 何やっているとか分らない人が多い / アラサー界隈を知った		
	偶発的な出会い	来ると目的が違う人同士が交わる場所 / 交流する気がなかった人と話せる / まっすぐでは会えないと会える場所		
	いろいろな人にスポットが当たる	いろいろな人にスポットが当たる / グストにスポットライトが当たる / 作家などグリラ的にスポットが集まる		
さまざまな価値観・人を知ることができる	多様なコミュニティの交わり	いろいろなコミュニティからちょっとずつ人が集まる / 単一コミュニティではなくマルチコミュニティ		
	みんなの価値観・考え方を知ることができる	みんなの考え方が「見える」 / 様々な立場の人の価値観が知れる / 他の人の違った意見が聞ける / いろいろ人が見えるから自分のことが見える		
	いろいろな人・生き様を知る	「色々な人がいる」ということを実感できる / 生き様を知る / いろいろいる人の生き様を知れる / 人間模様いろいろ見えておもしろい物の見方が変わってきた / 今までと違った見方ができる		
	子どもたちの居場所・まなびの場	子どもたちの居場所・遊び場になっている / 子どもたちが大人と遊んでいる / 子どもたちに人気 / 子どもたちの居場所 / 校区越えて子どもが来る / 子どもたちの人気の遊び場 / 放課後子どもが楽しめる場所 / 休日も来たい / 社会の最低限のモラルを学べる / 周りにふるまいを覚えて学ぶ / 子どもたちが成長できる場 / 子どもたちのルール / 子どもがいる大人に会える場所		
子どもが挑戦・表現できる	子どもと一緒に過ごせる	子どもが自由に描ける場があることがよい / 遊び延長で料理できる		
	子どもと来ても泣いてもおやつでも気にせず過ごせる / 死なない程度に見る子育て	子どもと来ても泣いてもおやつでも気にせず過ごせる / 死なない程度に見る子育て		

多様な人々の共創を伴う芸術文化活動の価値はいかに評価できるか？

表2 関係者評価ワークショップで得られた言説の再分類表(2)

大分類	中分類	小分類	コード(言説)
建物を運営の在り方が魅力的	魅力的な町家が後世に残り、人を繋ぐ	建物を後世に残したい・活かしたい	良い建物を残す / 古き良きものを後世におくりたい / 空き家の活用・地域資源 / 古い家を知る (2) / ものを大切にできる / 町家や空気が好きな人が集まる
		町家の魅力・新しさと懐かしさ	新しくて懐かしい / 趣がある・古いのに新しい / 懐かしさと新しさを感じる場所 / 素敵な建物 / おしゃれな建物 / 古い町家であることが重要 / 町家は着物撮影に向いている
		建築が人やアクティビティをつなぐ	内側に入りやすい建物の設計(眺める・半分建物のうち) / ガラス張りなのオープンでいい / 外と地続きの感覚 / キッチンが雑音的に機能
	スタッフが開放的で多様	「半分、家」のような空間	半分、家 / サービスのない空白 / フリードリンクの過ごし方 / ちょっと音楽できるお兄さん
		スタッフがオープンかつホスピタリティが高い	スタッフの方がオープンな感じ / スタッフの人たちがオープン / スタッフのホスピタリティの高さ / 町家スタッフのホスピタリティが激しい / スタッフが定位置にいない
		スタッフの属性の多様性	スタッフが外部から来ているから地域の枠がない / スタッフの属性が様々(地元じゃない)
	五感で味わう場	美味しいものが食べられる	美味しいものが食べられる / 食べ物美味しい / ごはんを食べる / 地域のお店にとってもいい
		地球・季節を感じる	地球を感じる(太陽・風・海・緑) / 季節によって居心地のよいスペースが変わって楽しい
	訪れやすい	気軽に参加できる	予約不要で気軽なワークショップ / 多様性のあるワークショップ(予約不要なものも多く参加しやすい) / いつも何かやってる / お金がかからない
		誰でもふらっと立ち寄れる	行きやすい / ふらっと立ち寄れる / 誰でもふらっと立ち寄れる /
みんなで作りあげる・様々な人の考えで変化する場		みんなで作り上げている雰囲気好き / スタッフ関係なく一緒に作りあげる・楽しむ / さまざまな人の考えがあり、日々変える	
ひ金石のまちとをつなぐ	金石のシンボルとして内外を繋ぐ	金石の目的地・シンボルかつ憩いの場	目的地になる / 金石の目的地になる場所・町家づくり / 地域の人たちの憩いの場所であり、他地域の人たちの目的地になる / いるる小さな目的地になり得るものがある / 知り合いがいなくても金石に訪れやすくなった / 金石の憩いの場 / 金石のシンボリックな感じ / 町のシンボル
		中と外が繋がる	中と外(町民 / 町外の方)をつなげる / よそ者にとって貴重な地元の方との交わりの場所 / 黒板を通した間接的な繋がりが心地よい
	金石を知る・学ぶきっかけを生む	金石を知る・関わるきっかけになる	金石の文化・歴史を知ることができる / 金石を知る / 地域を知るきっかけにもなる / 地域のことを知れる・楽しめる / 金石外の人が金石のことを知ることができる / 金石の祭り / 金石のまちを歩く
	まちの風景やまちへの想いを育む	シビックプライドを育む	思い出の場所 / シビックプライド / 町に対する誇りを育むことができる(2) / 金石に戻ってくる人が増える
	現状の「価値や意味」以外の言及	現状の「価値や意味」以外の言及	現状の「価値や意味」以外の言及
分類外	金石町家の未来展望	金石町家の未来展望	可能性を感じる / 種が与えられる場所になるとよいのでは / 町のシンボル・中心としてしているような活動が生まれたり広がったりしたらいいな / 人にお世話される・お世話できる田舎づくり
		金石町家の難しさ	自分がネガティブすぎると聞かされたところは入りづらい / 何をすればいいのかわからない(ただ楽しいだけでいいの?)

在り方に価値を見出している関係者が非常に多く、また、そのような場の在り方が、自己と異なる価値観にふれることや、子どものまなびや気づきにも繋がっていると捉えられている。

そのほか、趣の中に新しさを感じる町家空間が後世に残ることや、本活動の「みんなで作りあげる・さまざまな人の考えで変化する場(3)」といった運営の在り方の魅力に関するコードで構成された【建物や運営の在り方が魅力的(41)】や、本活動が金石地域内外の人々および、「人とまち」を繋ぐ接点となっていることに関する言及で構成される【金石のまちとひとをつなぐ(27)】が抽出された。

#### 4-3. 関係者評価 WS を通して得られた成果と課題

関係者評価 WS が、WS 参加者にどのような変化や気づきを与えたのか、また、多様な関係者と共に活動の価値について対話する機会をどのように捉えたのかを明らかにするため、WS 参加者を対象とした事後アンケートを実施した。本節では、事後アンケートの結果を述べた上で、アンケートの回答内容および、前項で整理した WS 参加者の言説分析の結果も踏まえ、本ワークショップの成果と課題を考察する。事後アンケート用紙は WS 時に印刷して配布した。また、回答方法は、アンケート用紙への回答、または WEB フォームへの回答のいずれかを参加者自身が選

択する形とした。アンケート項目を示す(表3)。なお、アンケートは、WSに対する率直な意見を収集するため、属性等の設問は設けず、匿名性を確保した。回答数は15件(回収率75.0%)である。

まず、【WSの満足度】については、「非常に満足」(60.0%)、「やや満足」(33.3%)、「どちらでもない」(6.7%)と、比較的高い満足度が得られた(図6)。その理由として、

「様々な人が考えている町家の価値を聞くことが出来て良かった」や、「いろいろな人たちと話しながらか町家の価値について考える時間となり、良かった」など、様々な人との対話の中で他者の捉える価値を知ることができた点に関する肯定的な意見が最も多かった。また、「あまり町家で交流したことのなかった人たちと話すことができたり、口外すべきか悩んでいたことを言語化し伝えることができた。(中略)周りの反応がどんなものか不安だったが、思いの外受け入れてくださって安心できた。」との意見や、「WSを通じて、(中略)会ったことがなくお会いしてみたかった方や、関わりを知らなかった意外な方との交流を持つことができたことがとても有意義だった。」などの言及が見られ、WSが他の関係者との出会いやコミュニケーションを創出するだけでなく、自身が受容されているという感覚をももたらしたことがうかがえる。そのほか、「集まった人たちの熱量がどんどん高まっていくこと、その中に曖昧な縁の力強さを感じた」といった、WSの場の空気感に対して、満足感を得た参加者も見られた。

一方、「個人的には一回のWSが短く感じられ、表面的な価値を羅列して終わってしまった感があり、もう少し長くやってゆっくりと考えを巡らせてみたい気もした」や、「時間制約の都合と、町家の魅力をテーマに限定している分、参加者の意見は大体似通ってしまっていたため、

表3 関係者評価ワークショップ事後アンケートの設問

- |     |  |
|-----|--|
| (1) | ワークショップの満足度(5件法)   |
| (2) | 満足度の理由(自由記述)   |
| (3) | ワークショップを通して、金石町家(仮)の価値や意味を考えたり、自身と金石町家(仮)の関係を考える上で、新たな気付きや心の変化はあったか(5件法) |
| (4) | (3)に関して、どんな気付きや変化があったか(自由記述)   |
| (5) | 他の参加者やファシリテーターとの対話を通して、「面白い」と感じたことや印象的だったこと、疑問に感じたこと(自由記述)               |
| (6) | 今後、「金石町家(仮)の価値や意味」について考える機会があったら参加してもよいと感じるか(5件法)                        |
| (7) | ワークショップ全体への感想や意見(自由記述)   |

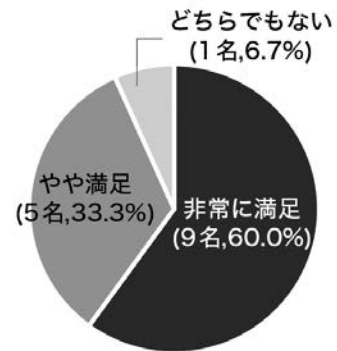


図6 WSの満足度

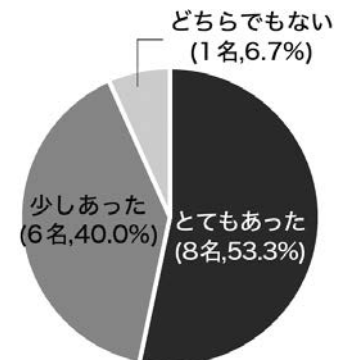


図7 金石町家(仮)の価値や意味、自身と金石町家(仮)の関係を考える上での新たな気づきや心の変化

町家運営を持続させていくために（中略）、様々な知識を持つ方からの色々なアイデアが気軽に聞ける仕組みがあってもよかった」といった、WSのプログラム構成や時間配分に対する指摘も見られた。

次に、【WSを通して、金石町家(仮)の価値や意味を考えたり、自身と金石町家(仮)の関係を考える上で、新たな気づきや心の変化はあったか？】との問いには、「とてもあった」(53.3%)、「少しあった」(40.0%)、「どちらでもない」(6.7%)の回答を得た(図7)。具体的な気づきや変化については、「参加する前は、自分はレンタルスペースのお客さんという関係性と思っていたが、関わる人ひとりひとりが金石町家(仮)を構成する成分の一つのような感覚になった」など、自身と本活動の関係性を捉え直す契機となった点や、「何気なくいつも居る人も、こんな思いでいるのかという気づきがあった」といった、他者への理解が深まった点への言及があった。また、「繋がりが希薄になる現代で、曖昧でかつ寛容な場所が必要なのではないかと思った」や、「町家にほんやりと抱いていた印象を再認識できた。はっきりと形にすると他とも比較して疑ってしまうのでやっていなかったが、案外やってもいいものだと感じた」など、今回のWSが、本活動に対する各人の想いを改めて再認識する機会となっていたことが示唆された。

【他の参加者やファシリテーターとの対話を通して、「面白い」と感じたことや印象的だったこと、疑問に感じたこと】については、「半分、家」など、妄想が広がるキーワードが印象的だった」や、「屋根のある公園」という言葉が印象的だった」など、他の参加者の価値を表現する言葉が印象に残った参加者が複数見られた。また、「金石のことを知れる場所」として町家を捉え、関心を高く持っていた人がいたこと。(中略)「知れること」が価値としてあると考えにくいと思っていたが、そうでもないと感じた」という意見や、「町家が「町のシンボル」として機能し出していることが印象的だった」など、自身とは異なる見方や、自身が知らない活動の一面に関するエピソードを聞いたことにより、活動の捉え方が変化した参加者も見られた。

そのほか、【WS全体への感想や意見】として、「WSに参加して、より町家に対して親近感が湧き、町家が好きになった」、「皆さんが心から金石町家(仮)を大好きなのだと嬉しくなったし、その繋がりに自分も入ることができて、みんながチームのようで自分自身もとても嬉しくなった」といった言及が見られ、WSが活動に対する親近感の醸成や、自身が活動のコミュニティに受容されている感覚をもたらしたことが示された。また、こうした機会を定期的で開催してほしい、といった声が複数見られた。一方で、「1回目と2回目のテーマが同じだったので、盛り上がりには欠けた印象であった」、「短時間で簡単なプレゼンまで要求するWSのため、出た意見を理屈が通るように再構成してしまいがちになる」といった、WSのプログラム構成や時間配分の課題に関する指摘も確認された。

事後アンケート結果および、前項の内容を踏まえ、ここからは、関係者評価WSの成果と課題をまとめる。まず、成果として、(1)活動に対する自身の想いを言語化し他者へ共有するというプロセスを通して、活動への親近感の醸成や、自身が活動関係者に受容されているという感覚をも

たらしめたことが示された。また、自身も活動を構成する一つの要素であるという、(2)自身と活動の関係性の捉え方に肯定的な変化が生じた参加者も確認された。さらに、WSでの他参加者との対話を通じて、(3)日常の交流の中では気づかなかつた、他の関係者の一面や想いを知るなど、関係者間の相互理解が促された。加えて、自身とは異なる活動の捉え方にふれることにより、(4)活動の価値を再考し、新たな見方や気づきを得る、といった効用が見られた。そのほか、WS参加者の言説の整理・分析から、(5)関係者各人の言葉で本活動の多角的な価値が顕在化した点は、大きな成果であったと考える。

一方、事後アンケートでは「町家の価値や意味を具体的な言葉や文で表すことが、とても難しいと感じた」といった意見もあり、価値を言葉で表現すること自体に困難さを感じた参加者や、WSの時間が短く議論が深められなかったと感じた参加者、複数回同じテーマで議論を行うことに不足感を感じた参加者が見られた点は、大きな課題である。「活動の内在的な価値を言語化する」という行為のハードルを下げる工夫や、限られた時間の中でも十分な対話が可能となるようなプログラム設計など、WSの構成について改善する必要性が示された。

## 5. 総合考察

本章では、運営評価WS(3章)と、関係者評価WS(4章)、この2つのWSの横断的分析から、(1)対話・協働プロセスが活動展開及び活動関係者に与える変化や影響(5-1)および、(2)共創型芸術文化活動の多角的な価値を顕在化する評価プロセスとしての有効性と課題(5-2)について考察する。

### 5-1. 対話・協働プロセスが活動展開及び活動関係者に与える変化や影響

運営評価WS、関係者評価WS、双方共通で得られた成果として、参加者がWSでの他者との対話を通じ、活動の価値・意義や評価のあり方に関して、自身とは異なる考え方や捉え方を肯定的な気づきとして受容し、相互理解や共感が促された点が挙げられる。両WSともに、他者が捉える本活動の価値や意義を知る過程で、自身が捉えていなかった活動の性質について認識したり、自身が無意識的に感じていた「良さ」が他者の言葉を介することで価値として顕在化したりするなどの作用が見られた。加えて、運営評価WSでは、メンバー間の対話を介して、一般化・普遍化された言葉からこぼれ落ちてしまう価値について、丁寧にすくい上げる評価を行いたいとの評価意識が顕在化した。これらの点から、WSにおける対話のプロセスが、活動の価値や意義を各人が新たな視点で再考し、また、運営者が真に求める評価のあり方について共通認識を醸成していく上でも、重要なプロセスとして機能したと考える。

上記と関連して、WSの場が、日常とは異なる関係者間のコミュニケーション・対話の機会や、新たな出会いを創出した点も成果である。運営評価WSにおいては、それまで活動の価値や評価について運営メンバーが集まって議論する機会が持たれておらず、今回のWSが双方の考えの共

多様な人々の共創を伴う芸術文化活動の価値はいかに評価できるか？

通点や相違点を明らかにする契機となった。関係者評価 WS においても同様に、普段の日常的な会話ではふれることがない、他者が抱く本活動への想いや視点について、評価者や運営者のみならず関係者同士が互いに語り合い認識するプロセスが、関係者間の連帯感を醸成する作用をもたらしたことがうかがえる。また、WS の場自体が、関係者間の新たな出会いも生み出し、共創型芸術文化活動の活動基盤を支える、人的ネットワークの形成・強化に寄与したと考えられる。

さらに、活動について考える機会が一層増えたり、自身が活動を構成する一部であるとの感覚を抱いたりといった、活動に対する当事者性の向上に関する言及も、2つの WS で共通して確認された。このことは、多様な人々の共創によって活動が展開・変化していく性質を持つ共創型芸術文化活動において、重要な変化であると考えられる。特に、本活動においては、運営者自身が「運営者／利用者」や「地域住民／地域外の人々」といった、属性による境界をフラットにすることを意識して活動している。活動を「自分ごと」として捉え、主体的に参画・共創する関係者が増えることは、本活動の目指す姿や持続的展開を実現する上で重要であろう。そうした観点において、本 WS が、評価活動という面だけでなく、「共創」を促進するプログラムとしても有効に作用することが明らかとなった。

今回示された上記の効用は、本活動のみならず、他の共創型芸術文化活動の持続的な活動展開においても重要な変化であると考えられる。一方、参加型評価が持つ、関係者間の新たな関係構築や当事者意識の向上といった、様々な効用を高めるためには、継続的な参加型評価の実践が重要であるとされる（源 2016, pp.210-211）。そのため、今後は、継続的な評価実践を可能とする、参加型評価のシステム構築やモデル化、運営者自らが取り入れやすいツール設計も必要である。

## 5-2. 共創型芸術文化活動の多角的な価値を顕在化する評価プロセスとしての有効性と課題

はじめに、多角的な価値を顕在化させる評価プロセスとしての有効性について考察する。2つの WS で得た言説を比較すると、運営者が活動目的・意義として意識している内容と、関係者が活動の価値・意義として捉えている内容が、概ね重なる部分が多い。ここから、これまで運営メンバーの肌感覚で認識・共有されてきた本活動の多角的な価値が、運営以外の関係者も含む様々な人々の言葉によって言語化されたと同時に、運営者が意図する活動の目的がある程度果たされていることが示された点は、大きな成果である。また、関係者評価 WS で言及された「アート・クリエイティブなことと出会える」など、運営者が目的として言語化していなかった価値や、「スタッフが開放的で多様」といった運営側から捉えにくい価値が顕在化した点は、多様な立場を持つ関係者と共に評価を行う参加型評価導入の効用と考えられる。

さらに、2つの WS の結果、運営者が意識する活動目的だけでなく、様々な関係者が捉える活動の価値も、非常に多岐に渡ることが顕在化・可視化された。その結果、活動の一部の特性のみに焦点を当てた評価のあり方では、本活動が有する多角的な価値を十分明らかにできないことが推察されるなど、今回の評価 WS が本活動の特性に則した評価の在り方を検討する上で重要な視

座を提示した。本活動と同様に、異なる立場を有する関係者が様々な形で活動に参加する共創型芸術文化活動においては、関係者が捉える価値や、活動が及ぼす影響が多義的なものとなる可能性が高い。そうした多様な価値をすくい上げる評価のあり方として、参加型評価が有効であると推察される。

一方、2つのWSに共通して見られた課題として、「価値」を具体的な言葉として表現することに対して難しさやハードルの高さを感じた参加者や、様々な人の言葉をまとめ上げグルーピングや再構成をしていくことに対して抵抗感を感じた参加者が見られた点が挙げられる。その点において、評価参加者の心理的ハードルを下げるアプローチの検討や、各人の言葉やエピソードを安易に収斂させようとせず、個々の言葉を丁寧に掘り下げ活かす工夫など、評価設計の改善も求められる。

また、今回行った関係者評価ワークショップに関しては、本活動への主体的な参与傾向が高い参加者が多かったことが起因して、非常に多角的な価値が抽出された可能性もある。活動参加頻度の低い関係者を対象に実施した場合に、どのような結果が得られるのかについても、今後は明らかにしていく必要がある。さらに、今回のWSでは、今後の評価の方向性を定めることや、現段階での活動の価値を顕在化させることを焦点に置いた評価設計を行ったため、具体的な活動展開・改善に向けた評価結果活用という段階までは達成できていない。その点については、評価WS参加者からも、「活動の課題やネガティブな意見をどう扱うのかも大切ではないか」との指摘も見られた。今後、活動展開における評価結果の活用を目指す上では、本活動の課題についても明らかにできる評価設計が求められる。

## 6. まとめ

本研究は、共創型芸術文化活動への参加型評価の実装による、「(1)対話・協働プロセスが活動展開及び活動関係者に与える変化や影響」を明らかにすること、及び、「(2)共創型芸術文化活動の多角的な価値を顕在化する評価プロセスとしての有効性と課題」を明らかにすることを目的とし、金石町家(仮)での①運営評価WS及び、②関係者評価WSを実施した。

まず、①運営評価WSの成果として、(1)自身と異なる価値の捉え方への相互理解の醸成、(2)目指す評価の方向性に関する発見や気づき、(3)活動価値の再認識、(4)活動に対するオーナーシップの向上、(5)WSのプログラムとしての面白さや可能性が示唆された。一方、課題として、一般化・普遍化した言葉で表現しきれないニュアンスをもった価値をすくい上げる評価の在り方が求められた。

次に、②関係者評価WSの成果として、対話のプロセスが(1)活動への親近感の醸成や、活動関係者に受容されているという感覚をもたらした点、(2)自身と活動の関係性の捉え方に肯定的な変化が生じた点、(3)関係者間の相互理解が促された点、(4)活動の価値を再考し、新たな見方や気づきが生まれた点、(5)活動の多角的な価値が顕在化した点、が挙げられる。一方、WSのプロ

グラム構成を再考する必要性や、価値を言語化することに対する心理的ハードルを下げる工夫といった課題が示された。

最後に、①運営評価 WS と、②関係者評価 WS を横断的に分析した結果、「(1)対話・協働プロセスが活動展開及び活動関係者に与える変化や影響」として、他の関係者の価値観に対する共感・理解の醸成、新たなコミュニケーション機会の創出、関係者の当事者意識の向上といった、「共創」を促進するプログラムとしての有効性が確認された。

また、「(2)共創型芸術文化活動の多角的な価値を顕在化する評価プロセスとしての有効性と課題」に関しては、評価 WS が、運営者が捉えきれていない価値も含めて、活動が有する多角的な価値をすくい上げ、様々な関係者の言葉によって顕在化させる機能を有していることが示された。一方、課題として、WS 設計の改善や、今回と異なる関係者層を対象とした WS 実施と比較分析、さらに、活動の価値だけでなく課題を顕在化させる方法の検討が必要である。

なお、今回は単発の評価 WS であったため、活動および評価 WS 参加者の変容を捉えることが困難であった。活動の持続的展開の上では、その時々々の状況を継続的に観測していく必要があるうえ、経年的に捉えることで明らかになる活動の存在意義もあることが予想されるため、継続的に実施できる評価システムの構築が求められる。また、今回の WS では、筆者をはじめとする運営者以外の人材がファシリテーターや WS 結果の分析を担ったが、参加型評価の効用として提唱されている「評価結果の実用的活用」や「組織の改善や変革」の強化を目指すならば、運営者自身の評価能力の向上も重要である。長期的な活動展開が望まれる共創型芸術文化活動において、継続的かつ効果的な評価実践を実現していくため、現場の運営者自らが評価実践できるような方法論の確立や評価ツールの設計も求められる。加えて、本研究は、1 事例での単発的な評価実践のみに留まっており、他事例との比較や、他の評価手法と参加型評価の比較にまでは至っていないといった、研究上の課題がある。共創型芸術文化活動における参加型評価の有用性を明らかにしていくために、今後は、経年的な参加型評価導入による効果を明らかにすることや、他の活動事例での参加型評価の実践と比較分析、参加型評価以外の評価手法との比較といった、さらなる調査分析が求められる。

## 注

- 1) 多様な人々との協働・共創を伴う芸術形態としては、「コミュニティ・アート」や「ソーシャル・エンゲージド・アート」、「参加型アート」など、現代芸術の領域を中心に発生してきた様々な形態がある。中でも、近年の日本国内では、「アートプロジェクト（以下 AP）」と呼称される芸術実践が各地で展開されている。熊倉は、AP を「現代美術を中心に、おもに 1990 年代後半以降日本各地で展開されている共創的芸術活動」とし、その特性を、①「制作のプロセスを重視し、積極的に開示」、②「活動が実施される場や社会的状況に応じた活動」、③「さまざまな波及効果を期待する継続的な展開」、④「さまざまな属性の人々によるコラボ

レーションとコミュニケーション」、⑤「芸術以外の社会分野への関心や働きかけ」の5点に整理する。また、APは「作品展示にとどまらず、同時代の社会の中に入りこんで、個別の事象と関わりながら展開」されることにより、芸術と社会・人々の「既存の回路とは異なる接続／接触のきっかけとなることで、新たな芸術的／社会的文脈を創出する活動」であると述べる（熊倉ほか 2014）。

- 2) 2017年に制定された文化芸術基本法では、前法の文化芸術振興基本法の改正にあたり、「文化芸術に関する施策の推進に当たっては、文化芸術により生み出される様々な価値を文化芸術の継承、発展及び創造に活用することが重要であることに鑑み、文化芸術の固有の意義と価値を尊重しつつ、観光、まちづくり、国際交流、福祉、教育、産業その他の各関連分野における施策との有機的な連携が図られるよう配慮されなければならない」（第2条10項）の文言が新たに追加された。
- 3) 源（2016）は、参加型評価には、「利害関係者評価」、「エンパワーメント評価」、「スクール・ベース評価」、「熟議民主主義型評価」、「発展型評価」、「実用重視型評価」、「協働型評価」といった代表的アプローチをはじめとする複数のアプローチがあり、現場では評価の目的やプログラムの特性に応じて複数アプローチを用いるケースや、特定のアプローチ方法を念頭に置かずに評価目的に合わせた評価設計を行う場合も多い、と述べる。
- 4) 金石町家(仮)Instagram,<https://www.instagram.com/kanaiwamachiya/>, 2025年10月10日閲覧
- 5) ワークインプログレスとは、「準備中、進行中、工事中」を意味する言葉であり、一般的には、プロジェクト等の進行途上の状態を指す。日本の現代芸術の領域においては、美術家の川俣正のプロジェクトや作品名として使用されることが多く、「完成までのプロセスを作品とみなす手法」（artscape「Artwords」, <https://artscape.jp/artword/7024/>, 2025年10月31日閲覧）とされる。

## 参考文献

- アーツ・コンソーシアム大分（2019）,『平成30年度アーツ・コンソーシアム大分構築計画実績報告書 文化と行政ハンドブック』, アーツ・コンソーシアム大分
- 金石町家(仮)Instagram, 〈<https://www.instagram.com/kanaiwamachiya/>〉, (参照 2025-10-10)
- 菊池宏子, 帆足亜紀, 山内真里, 若林朋子（2016）,『働き方の育て方 アートの現場で共通認識を作る』, アーツカウンシル東京
- 熊倉純子（監修）, 菊池拓児・長津結一郎（編）（2014）,『アートプロジェクト 芸術と共創する社会』, 水曜社
- 静岡県文化プログラム推進委員会（2021）,『静岡県文化プログラム2019年度「地域密着プログラムを対象とした試行的評価」報告書』, 静岡県文化プログラム推進委員会

多様な人々の共創を伴う芸術文化活動の価値はいかに評価できるか？

- Geoffrey Crossick, Patrycja Kaszynska, 中村美亜 (訳) (2022), 『芸術文化の価値とは何か—個人や社会にもたらす変化とその評価』, 水曜社
- 東京アートポイント計画 (2011), 『アートプロジェクトを評価するために—評価の〈なぜ?〉を徹底解明』, 公益財団法人東京都歴史文化財団東京文化発進プロジェクト室
- NPO 法人アート NPO リンク (2019), 『ARTS NPO DATABANK 2018-19 「実践編! アートの現場から生まれた評価」』, NPO 法人アート NPO リンク
- 文化庁×九州大学 共同研究チーム (2021), 『文化事業の評価ハンドブック—新たな価値を社会にひらく』, 水曜社
- 源由里子 (2016), 『参加型評価—改善と変革のための評価実践』, 晃洋書房
- 三好皓一, 田中弥生 (2001), 「参加型評価の将来性—参加型評価の概念と実践についての一考察—」, 『日本評価研究』, 第1巻, 第1号, pp.65-79
- 森司 (監修) (2014), 『東京アートポイント計画が、アートプロジェクトを運営する「事務局」と話すときのことば。の本』, 東京文化発進プロジェクト室, pp.50-71
- 吉田隆之 (2014), 「自治体文化政策における参加型評価の可能性—あいちトリエンナーレを事例に—」, 『文化経済学』, 第11巻, 第1号, pp.39-52

